

松戸市及びその周辺における市街化の影響

蓮 尾 順 子

(1) 研究の目的

第2次世界大戦後、昭和20年代におこった大都市の復興により周辺都市への膨張拡散が始まり、そして昭和30年代の高度成長期に入るとこの動きは一層の進展をみせた。しかし昭和45年以降、日本経済が減速し安定成長期を迎えるにいたってこの動きはこれまでとは違った形をみせ始めている。本論では、昭和30年から現在までのこういった動きを都市化・市街化としてとらえ、都市化・市街化が東京及びその周辺に与えた影響を調べてみた。第1章では、東京大都市圏全体をとらえ、そして第2章では、その中で最後に市街化が及んだとされる千葉県北西部を、また第3章では、千葉県北西部にあって比較的早い時期に市街化がおこった松戸市をそれぞれ取り上げた。特に、第2章では昭和45年以降現在までの時期に焦点をあて、安定成長期に入ってから市街化がどのような変化をみせているかに注目して調べた。また、第3章では松戸市における人口推移の様子と商工業の現状を、市街化の視点からとらえて考えてみた。

(2) まとめ

まず、東京大都市圏全体の設定だが、東京大都市圏は通勤・通学率3%以上の地域として設定した場合はそれほど圏域拡大はみられない。しかし、都市的土地利用率90%以上の地域でみると飛地的な発展をしている。これは、主に既成市街地における地価の高騰による、市街地の面的拡大の阻害と、交通条件の改善による通勤時間の短縮によるものと考えられる。

以上のような大都市圏域内にあって「時計まわり」に進んだ市街化が最後に及んだとされるのが千葉県北西部である。この地域での昭和45年以降の変化としては、持家率の上昇や人口増加率（特に社会増加）の低下、そして就業地域の分散傾向

などがあげられる。このような傾向を持つ地域から、松戸市を1事例として取り上げ市街化による影響をみてみた。交通条件の改善と大規模住宅団地の開発によって、昭和30年以降急激な人口増加をとげた松戸市は、昭和55年現在、千葉県内では千葉市、船橋市に次いで人口の多い市となっている。水戸街道の宿場町あるいは江戸川の河岸として陸運・舟運の地であった松戸市は、鉄道の発達以後これといった伝統産業の育成もないままに、東京への住宅通勤都市として大都市圏に組み込まれてしまった。従って、工業においては市内に3つの工業団地を持ちながらも、内陸部であるため、そして住宅通勤都市であることからくる制約を受けるため、ある範囲内での成功しかとげられていない。また、商業についても、人口急増都市であるため最寄品の販売額は人口に比例して伸びているが、買回品については東京商圏と柏商圏に狭まれ伸び悩んでいる。また、このような状況とともに、千葉県北西部でも比較的早い時期に市街化をとげた松戸市では、近年社会増加が停滞する傾向にある。これは、市街地の飽和による転入の減少が主たる原因と考えられるが、それ以外に(1)駅周辺部(2)団地からの転出による影響も大きい。従って、西暦2000年に55万都市を目標とする松戸市の行政サイドからは、当初の人口抑制から抑制緩和へという意見も出たという。ただし、昭和63年の北総鉄道の開通によって大幅な人口増加が見込まれるため、現在のところは静観する状態にある。こういった社会増加の停滞の地にも、安定成長期に入ってから、東京大都市圏内では幾つかの微妙な変化がみられ、個々の市にもその変化が反映されている。松戸市も含めてこれから大都市圏全体の動きに注目していきたい。